

研究科長・理学部長の任期を終えて

佐藤 勝彦



佐藤勝彦（さとうかつひこ）

経歴

平成 11-12 年度、ビッグバン宇宙国際研究センター長。平成 11 年度物理学専攻長、平成 12 年度東京大学評議員。平成 13-14 年度理学系研究科長・理学部長。専門は宇宙物理学・宇宙論、インフレーション理論、超新星ニュートリノ等の研究

2001年の4月に研究科長・学部長に任ぜられて以来、ただがむしゃらに用務を勤めさせていただいておりましたが、あっという間に2年が過ぎてしまいました。

ご承知のように、昨今大学の教育研究体制に対する批判は強く、中でも日本経済の不調の中で人の生活、産業に直接寄与することが少ない基礎科学の教育・研究を進める理学系研究科・理学部をあたかも過去の遺物、旧体制のシンボルのように見なす論調も見られ、私たちは極めて厳しい状況下にあります。

就任以来、私が心がけてまいりましたことはこの状況に受け身的に対応するのではなく、むしろ積極的に攻めの姿勢で立ち向かい、自らの改

革を進めることでした。まず重要と考えたことは、改革を始めるまず基礎として理学系研究科・理学部が自らのミッションを再認識し定義することでした。いわば自らの団結綱領である理学系研究科・理学部憲章を岩澤先生を中心とした将来計画委員会に起草していただき、教授会で制定して頂きました。この憲章を基礎とし、1) 自らを律する体制、2) 社会への発信、3) 国際化、特にアジア太平洋地域との交流、また4) 男女共同参画等について具体的対応を進めてまいりました。

1) については毎年研究科内の専攻・施設・センターの外部評価を理学系研究科として進める体制を将来計画委員会に作成して頂き、これに基づき平成13年度には天文専攻・天文教育研究センター、また平成14年度には生物化学専攻の評価が行われました。また教務委員会を中心として学生による授業評価も開始されました。言うまでもなく後者は単に教官の評価という以上に教育の改善という大きな目的があります。むしろこれらの評価はいくつかの専攻ですでに専攻として実施されていたものですが、研究科長名による実施により評価はより透明性の高いものとなったと言えるでしょう。2) についてはまず理学部広報委員会を発足させ、その第1の課題としてホームページの設計制作、その維持体制の確立に取り組んで頂き

ました。ゲラー委員長、またそれを引き継いで頂いた浦辺先生を始めとする広報委員会、また名取さんを始めとするホームページを担当された皆さんの献身的努力で、今やホームページはまったく見違えるようになり、維持されるようになりました。また一般市民や学生に理学の面白さを伝える公開講演会も始め、第一回の講演会には遠山文部大臣にもご出席・挨拶頂きました。同じ時期に始めた諮問委員会も、理学系の運営について広く社会から意見を求め、また運営の透明性を高めるため、マスコミ関係者、企業関係者などに委員となって頂いています。3) については、日本の大学が、世界に存在感ある大学としてさらに発展して行くためには、世界の大学、特に近隣のアジア太平洋地域の大学との連携協力が必要ですが、科学研究費の間接経費を用いた国際シンポジウム、スクールの援助などを始めました。すでに原子核分野でのスクール、オーストラリア、アデレード大学とのジョイントセミナーなどが開催されています。またスウェーデンの3大学などとの大学間協定の締結を進め、またソウル大学との相互授業料免除協定を結ぶなど務めました。4) の男女共同参画は国の大きな政策でもあります。理学系のさらなる発展のためにも必要なこととして、岡村先生を中心としてパネルディスカッションを開催するなど東大の

中でも早い時期に取り組み始めました。優れた女性が基礎科学の分野に進学、また研究者として理学系研究科のメンバーとなって頂くならば、理学系研究科の教育研究のパワーは飛躍的に強化されるでしょう。現在西原ワーキンググループ委員長を中心としてアンケート調査など通じて、慎重に取り組みが進められています。

しかし、法人化を1年後に控え、研究科の運営体制など、今後進めなければならない課題が山積みであることは言うまでもありません。岡村新研究科長を中心とした新執行部が基礎科学の教育・研究の組織としてふさわしい制度設計を進められることと確信しております。

本部の法人化準備関連会議を始めとする膨大な会議や事務連絡調整などに忙殺される2年間でしたが、この時期に研究科長を務めさせて頂いた最大の喜びは、小柴昌俊名誉教授が2002年のノーベル物理学賞を受賞されたことでした。小柴先生のノーベル賞受賞はいかに東大の基礎科学分野のレベルが高いことを示すものであり、その中核をなす理学系研究科の誇りでもあります。すぐ役に立ちそうな応用分野ばかり重要とする論調が強い昨今の状況の中で、小柴先生はすでに新聞などを通じて基礎科学の重要さを述べておられますが、さらにマスコミ等を通じて発信して頂けるものと思っております。

す。また私は今、これに加えて、大学を始めとする研究の体制、また国の科学研究費配分の体制がトップダウン的傾向を強めていることにたいへん懸念を持っています。科学、特に基礎科学の分野では研究者個人の創意に基づく多様な研究が行われ、これらが互いに競争、影響を及ぼしあうことで大きな成果が生まれてくるものであり、天才的科学家といえども他の多様な研究の成果なしには成果を上げることはできません。現在私は文部科学省のいくつかの委員会のメンバーも務めていますが、今後ともこれらの委員会、またマスコミなどを通じて基礎科学の重要性、ボトムアップ的体制の重要性を訴えていかねばならないと考えています。

最後になりますが、共に理学系研究科の運営・改革に取り組んで頂いた諸委員会の委員長メンバーの皆様、なかでも企画委員会、将来計画委員会の皆様に心から感謝申し上げます。また研究科長、執行部を支えて頂きました研究科事務の皆様にも心から感謝申し上げます。三浦事務長のリーダーシップの下、極めて充実した力量ある事務体制に支えていただきながら研究科長を務めることができたことを、この上もなく幸せであったと喜んでおります。ありがとうございました。